OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	書記法における東西混合 ： 様式の多様性、原理、変遷
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	阪大日本語研究. 2026, 38, p. 1-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』38（2026）

書記法における東西混合
――様式の多様性、原理、変遷――

Mixing Eastern and Western writing methods: Diversity, principles and evolution of styles

田野村 忠温
TANOMURA Tadaharu

キーワード：書記法、日本語、中国語、縦書き、横書き、混合記法

要旨

西洋の言語は日本語にも中国語にも語彙、文法の面を中心として多大な影響を与えたが、書記法の面も例外ではなかった。もし西洋の言語との接触がなければ、日本語にも中国語にも横書きの慣習は生じなかったはずである。

書籍の同一の版面に日本語、中国語と西洋の言語を共存させるときの書字の様式は歴史的に見ると相当に多様である。しかし、それらは無秩序に多様であるわけではなく、性質上3種類のものに大別することができる。また、日本語と中国語とで不一致の面もある。ここでは各種の記法の使用状況を観察、分析し、多様性と日中差を生み出した原理、記法の変遷の論理を探る。

1. はじめに

中国語は古来伝統的に縦書きによって書かれた。中国語に学んで形成された日本語の書記法にもそれは踏襲された。しかし、いわゆる大航海時代以来の西洋人の渡来により、日本語も中国語も横書きを使う西洋の言語と関わりを持つことになった。西洋の言語は日本語に対しても中国語に対しても語彙、文法の面を中心として多大な影響を与えたが、書記法の面も例外ではなかった。もし西洋の言語との接触がなければ、日本語にも中国語にも横書きの慣習は生じなかったはずである。

書籍（あるいは、雑誌、新聞）の同一の版面に日本語、中国語と西洋の言語を共存させるときの書字の様式――「混合記法」と呼ぶ――は歴史的に見ると相当に多様である。そして、様式のあり方には日本語と中国語とで差異もある。この小論ではその状況を観察、分析し、多様性と日中差を生み出した原理、記法の変遷の論理を探る。

2. 分析の概要と論述の方針

混合記法には一見無秩序と感じられるほど多様なものがあり複雑な様相を呈しているので、論述の見通しをよくするために分析の骨格を先に述べる。

書籍において漢字、仮名で書かれた日本語、中国語と欧字で書かれた西洋の言語を混在させるときの記法は、見かけ上は多様でも、性質上次の3種類のものに大別することができる。論述の簡潔のために、日本語と中国語を合わせて「亜語」――広義に過ぎる名称ではあるが――、英語に代表される西洋の言語を「欧語」と呼ぶ。

第1類　亜語と欧語の記法をともに遵守する記法
第2類　亜語の記法を優先する記法
第3類　欧語の記法を優先する記法

この分類は日本語、中国語の記法と西洋の言語の記法の食い違いに人々がどのような意識で対処したか、何を重視したかという観点に基づくものである。いずれの類の記法のうちにも種々の様式があるが、それについては以下の各節で述べる。

本論に入る前に論述の方針を数点記す。第1に、日本語と中国語の書記法という問題意識からすれば日本人、中国人が亜語の文章中に欧語の語句や文を含めて書く場合のことが最も重要であるが、西洋人による著作、欧語の文章中に亜語の語句や文を含めた事例、亜語と欧語を対訳の形で併記した事例なども併せて考察する。すべてが関係を持ちつつ混合記法の総体を成しているからである。

第2に、日本語、中国語の記法の外国語との関わりということで言えば、過去には西洋の言語以外にもサンスクリット語、チベット語、西夏語、モンゴル語を含む多数のアジアの諸言語との対訳の併記もあった。しかし、ここでの考察は日中両語が対訳の併記にとどまらずより広範に関わり、書記法の面でも大きな影響を受けた西洋の言語との関係に限定する。

第3に、西洋の言語の語句、文をもっぱら漢字や仮名による注音の形で書いた書籍は考察の対象の範囲に入らない。そのような記法は通俗的な語学書に多く見られ、例えば18～19世紀の日本で出版されたオランダ語語彙集の森島中良（ちゅうりょう）『類聚紅毛語訳』（1798（寛政10）年）、英語の語彙会話文例集の清水卯三郎『ゑんぎりしことば』（1860（万延1）年）や、19世紀を中心とする時期の中国で流通した英語語彙集である『紅毛番話』の類がある。それらは全面的に日本語、中国語本来の縦書きによっている。また、日本語、中国語をもっぱら欧字で書いた西洋の言語の書籍も同様に関心の対象外となる。

第4に、単一の書籍、あるいは、単一の版面が複数の混合記法を併用していることも珍しくない。論述の複雑化を避けるために、そのような事実には必要に応じて触れるにとどめる。

3. 第1類——亜語と欧語の記法をともに遵守する記法

さて、第1類の混合記法は、亜語、欧語ともにそれぞれの伝統的な記法の慣習に従って書くものである。すなわち、亜語は行が右から左に進む縦書き、欧語は文字が左から右に進む横書きにし、かつ、亜語と欧語の文字をいずれも正立した形で記すものである。この様式は今ではあまり見ることがないが、過去には多くの事例がある。

3.1. 基本的な様式

第1類の混合記法の早期の使用は、16世紀末の日本で出版されたキリシタン版『ぎやどぺかどる 罪人を善に導くの儀也』（1599（慶長4）年）の下巻の扉に見られる。そこでは縦書きの日本語にポルトガル語の書名 ‘GVIA DO PECADOR’ とラテン語による刊記が横書きで併記されている。

この記法を著作の本文に使った現存最古の事例はおそらく、フィリピンで活動したスペイン人キリスト教宣教師ペドロ・チリノ（Pedro Chirino）が編んだとされる閩南語とスペイン語の対訳辞書*Dictionarium Sino Hispanicum*（中国語・スペイン語辞典）の稿本（1604（万暦32）年ないしそれ以前）である。辞書と言っても、素朴な形式で小規模な未完成の語彙会話文例集である。

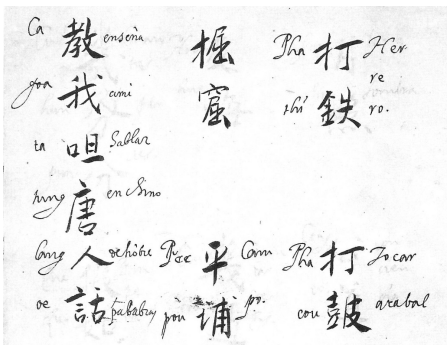


図1　Chirino *Dictionarium Sino Hispanicum*（1604（万暦32）年ごろ）[1)]

ここでは「教我咀唐人話」（中国語を教えてください）という縦書きの中国語文——「咀」は“話す”の意——の各字の右にスペイン語による語釈enseña（enseña）、a mi、hablar、en Sino、de hòbre（hombre）、palabraが横書きで書かれている。漢字の左に添えられているのはその発音である。

第1類の混合記法を本文に使った出版書籍の例としては、ポルトガル人宣教師プロスペロ・イントルチェッタ（Prospero Intorcetta、中国名殷鐸沢）による*Sinarum scientia politico-moralis*（中国人の政治道徳学）（1669（康熙8）年）が早い。次は同書に収められた中国語、ラテン語対訳の『中庸』の開始部分である。

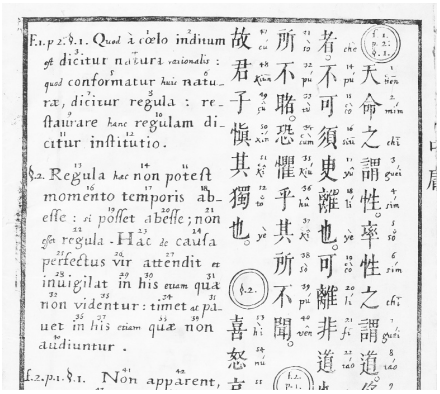
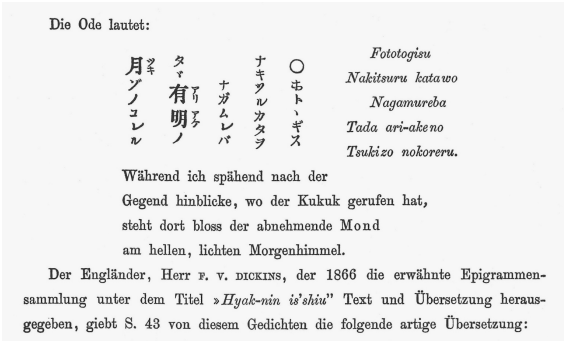


図2　Intorcetta *Sinarum scientia politico-moralis*（1669（康熙8）年）

ここでは中国語の原文が縦書き、ラテン語の訳文が横書きで書かれている。

次は日本語に関わる19世紀の例で、ドイツ生まれのオランダの言語学者ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン（Johann Joseph Hoffmann）が日本の詩歌をドイツ語で解説した*Japanische Studien: Erster Nachtrag zur japanischen Sprachlehre*（日本語研究―日本語教育のための最初の補足資料）（1878（明治11）年）の一部である。



Die Ode lautet:

月ゾノコレル　タゞ有明ノ　ナガムレバ　ナキツルカタヲ　○モトヽギス

Fototogisu
Nakitsuru katawo
Nagamureba
Tada ari-akeno
Tsukizo nokoreru.

Während ich spähend nach der
Gegend hinblicke, wo der Kukuk gerufen hat,
steht dort bloss der abnehmende Mond
am hellen, lichten Morgenhimmel.

Der Engländer, Herr F. V. DICKINS, der 1866 die erwähnte Epigrammensammlung unter dem Titel »*Hyak-nin is'shiu*" Text und Übersetzung herausgegeben, giebt S. 43 von diesem Gedichten die folgende artige Übersetzung:

図3　Hoffmann *Japanische Studien*（1878（明治11）年）

本文や訳文のドイツ語は横書き、仮名、漢字で書かれた和歌は縦書きによっている。

次はインドで活動した英国人宣教師ジョシュア・マーシュマン（Joshua Marshman、馬士曼）が『論語』を部分的に翻訳した*The Works of Confucius*（1809（嘉慶14）年）の一部である。

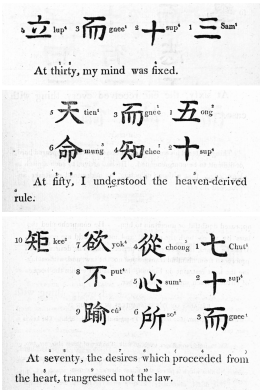


図4　Marshman *The Works of Confucius*, Vol. I（1809（嘉慶14）年）

縦書きの行が短いためにすでに見たほかの例とは印象が異なるが、第1類としての性質は共通である。すなわち、英語の訳文は横書きで書かれ、中国語原文の「五十而～」は1行2字、「七十而～」は1行3字の縦書きで書かれている。「三十而立」は一見横書きのようであるが1行1字の縦書きである（拙論(2026)）。

以上の例はいずれも西洋人の著作であるが、日本人による著作における第1類の混合記法の早期の使用は、18世紀に出版された最初の蘭学入門書である大槻玄沢『蘭学階梯』（1783（天明3）年序、1788（天明8）年刊）に見られる。



図5　大槻玄沢『蘭学階梯』巻下（1788（天明8）年）

この蘭和対訳の文例において、オランダ語文の “Vergenoeging gaat boven rykdom” は横書き、日本語文の「足ルコトヲ知ルハ富ニマサル」は縦書きによって書かれている。

3.2. 交差式

第1類の混合記法のうちにも種々の様式があるが、類を成す特徴的なものが3つある。

その1つは、亜語（または欧語）の文中に欧語（または亜語）の語句や文を埋め込むものである。そうするときには亜語と欧語の文字の進路が直交することになるので、この様式を「交差式」と呼ぶ。

交差式の事例は多くはないが、次は文法の解説を含む中国の英語学習書の早期の例である曹驤（じょう）『英字入門』（1874（同治13）年）における英語の時間表現に関する解説と、英国陸軍士官フランシス・ブリンクリー（Francis Brinkley）が日本人のために著した大部の英語学習書である『語学独案内（ひとりあんない）』（1875（明治8）年）における名詞の数に関する解説の各一節である。



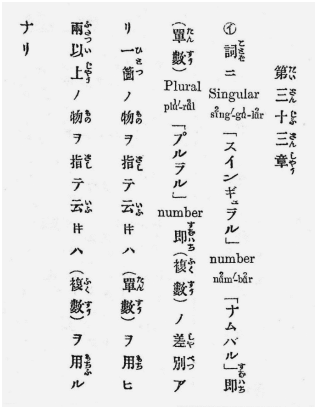
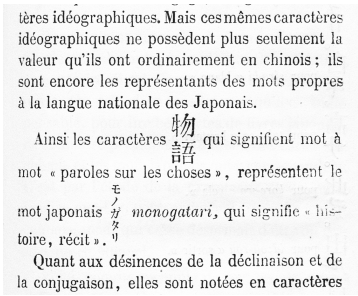


図6　曹驤『英字入門』（1874（同治13）年）[2]（左）
図7　ブリンクリー『語学独案内』初編（1875（明治8）年）（右）

『英字入門』では縦書きの中国語文中に “I see.”、“I am seeing.”、“I do see.” などの英文が通常の横書きの体裁で小字を使って埋め込まれている。『語学独案内』では、“Singular number”、“Plural number” という文法用語が行間を広く取った日本語文中に語単位で埋め込まれている。[3]

フランス人民俗学者、言語学者レオン・ド・ロニー（Léon de Rosny）が著した*Manuel de la lecture japonaise*（日本語読解の手引き）（1859（安政6）年）ではそれらの例とは逆にフランス語の文中に日本語が交差式によって埋め込まれている。



tères idéographiques. Mais ces mêmes caractères idéographiques ne possèdent plus seulement la valeur qu'ils ont ordinairement en chinois ; ils sont encore les représentants des mots propres à la langue nationale des Japonais.

Ainsi les caractères 物語 qui signifient mot à mot « paroles sur les choses », représentent le mot japonais モノガタリ *monogatari*, qui signifie « histoire, récit ».

Quant aux désinences de la déclinaison et de la conjugaison, elles sont notées en caractères

図8　Rosny *Manuel de la lecture japonaise*（1859（安政6）年）

同書は日本語を埋込む箇所でのみ必要なだけ行間を広げるという方法によっている。

いずれも先に見た亜語と欧語を分離して記した事例（図1〜5）と異なり、亜語と欧語が一体化しているが、両方の記法を遵守しているという点において第1類としての性質は共通である。

この様式の萌芽的な使用は大槻玄沢『蘭学階梯』にもすでに見られ、各種の機能語を一括した「助語」について述べたくだりでin（in）、het（the）、de（the）、zal（will）、is（is）、en（and）などの短い語が縦書きの日本語文中に交差式によって埋め込まれている。

3.3. 対向式

次に示すのは18世紀末に江戸で出版された最初の蘭和辞典である稲村三伯（さんぱく）・石井恒右衛門（つねえもん）・宇田川玄随他編通称『波留麻和解（ハルマわげ）』（1796（寛政8）年成稿）——「ハルマ」はその編集に利用された蘭仏辞典の編者であるオランダ人フランソワ・ハルマ（François Halma）の名、「和解」は日本語訳——の一部である。同辞典は、オランダ語の見出し語は活字版で印刷し、日本語による語釈は書写するという方法によって出版されたと言う。

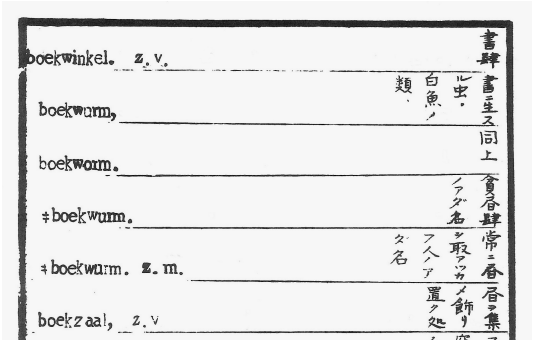


図9　稲村三伯他編『波留麻和解』（1796（寛政8）年成稿）[4)]

オランダ語の見出し語は項目の領域の左端から書かれ、日本語による語釈——「書肆」「書ニ生スル虫. 白魚（はくぎょ）【=衣魚（しみ）】ノ類.」など——は領域の相対（あい）する右端から縦書きで書かれている。欧語と亜語が左右の端から相手に向かって進む形になっているので、この様式を「対向式」と呼ぶ。これは日本に特有のものであり、中国には例を見ない。

江戸期から明治初期にかけて出版された欧語の辞書類には対向式の様式を使ったものがほかにいくつもある。歴史的に重要な例を選んで挙げれば次の通りである。

藤林普山『訳鍵』（1810（文化7）年）（『波留麻和解』に基づいて編まれた蘭和辞典）

奥平昌高・馬場佐十郎『蘭語訳撰』（1810（文化7）年）（蘭和類別語彙集）

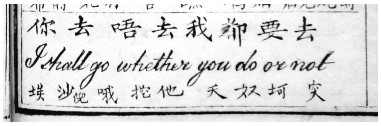
メドハースト（後出）『英語箋 一名米語箋』前編（1857（安政4）年）、同後編（1863（文久

3）年）（西洋人の編んだ英和類別語彙集、和英辞典の和刻本）

福沢諭吉編訳『増訂華英通語』（1860（万延1）年）（英語の語彙会話文例集）

村上英俊『仏語明要』（1864（元治1）年）（仏和辞典）

対向式の使用は辞書類だけではない。上記の福沢諭吉編訳『増訂華英通語』は中国で出版された英語の語彙会話文例集である『華英通語』咸豊5年本（著者不明、1855（咸豊5）年）の内容をほぼそのまま使い、そこに日本語訳と英語の発音を片仮名で加えるという方法で編まれている（拙論(2018)）。次は文例の1つである。



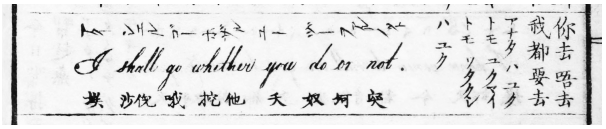


図10 『華英通語』咸豊5年本（1855（咸豊5）年）[5]（上）
図11 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』（1860（万延1）年）（下）

『華英通語』咸豊5年本では文例が中国語、英語ともに横書きで書かれているが『増訂華英通語』では記法が対向式に変更され、「你去唔去我都要去」という中国語文――「唔」は標準的な中国語の「不」に相当する広東語――と、「アナタ ハ ユクトモ ユクマイトモ ワタクシ ハ ユク」という日本語訳が領域の右端に縦書きで書かれている。この記法の変更もまた対向式が日本に特有のものであり、福沢が蘭和辞典の類で見慣れた様式に従ったらしいことを物語っている。[6] 英語の読みを示す仮名による注音は左に90度回転した横書きで書かれているが、これは後に見る第3類の混合記法に該当する。

ブリンクリー『語学独案内』も対向式を使っている。次は副詞の解説の一節である。

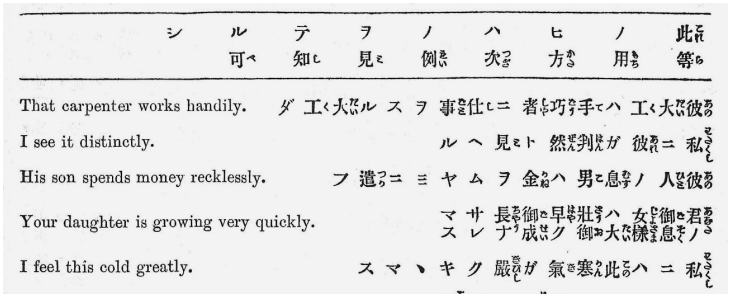


図12 ブリンクリー『語学独案内』初編（1875（明治8）年）

同書は先に見た通り解説の本文は交差式によっているが、対訳の文例や語句の提示には対向式を使い、図中の「彼(あの)大工ハ手巧者(てかうしや)ニ仕事ヲスル大工ダ」などは1行1字、「君(あなた)ノ御息女様ハ大壮御早ク御成長ナサレマス」は1行2字の縦書きで書かれている。執筆に協力した日本人が交差式の使用とともに記法を決めたのであろう。

3.4. 亜語1行1字縦書き式

対訳の併記において亜語をもっぱら1行1字の縦書きによって書いたものがある。次は中国で出版された英語の語彙会話文例集である馮(ふう)祖憲『英話註解』（1860（咸豊10）年）の一部である。



図13　馮祖憲『英話註解』（1860（咸豊10）年）[7)]

ここでは「這個人不是好人」（この人はよい人ではない）などの中国語文が右から左に向かって書かれている。この様式を「亜語1行1字縦書き式」と呼ぶ。

同類の英語学習書である『華英通語集全』（著者不明、1879（光緒5）年）もこの様式を使っている――ただし、同書は語彙集の一部には左から右に進む横書きを使っている――。また、『華英通語』咸豊5年本や同咸豊10年本（1860（咸豊10年）年）も語彙集の大半の部分においてこの様式を使っている――先に見た通り、文例には左から右に進む横書きが使われている（図10）――。

1行1字の縦書きは右から左に進む横書きにも見える。しかし、1行1字の縦書きの事例は過去に無数にあるが、右から左への横書きと確実に言える事例は極端に少ない。『英話註解』の後年の再版では中国語文が右から左への横書きに改められており（拙論(2026)）、そのことは1行1字の縦書きと右から左に進む横書きの区別の認識が曖昧であった可能性を示唆するが、確かなことは言えない。横書きと見るべき理由のないものは差し当たり1行1字の縦書きと考えるのが穏当である（拙論(2026)）。

日本語に関しては亜語1行1字縦書き式の例を見出すことができなかった。

第1類の混合記法は19世紀のうちにほぼ廃れた。文字を版面のどの位置、どの方向にも自在

に書くことのできる手書きや板刻と異なり、19世紀後半に普及した活字による組版では作業の効率のためには版面の様式が単純であることが求められたはずである。加えて、交差式の記法には文字を極端に小さくしたり行間を広げたりしなければならないという問題があり（図6〜8）、亜語1行1字縦書き式の記法には文字が亜語と欧語で逆方向に進んで読みにくいという問題がある（図13）。第1類の混合記法が廃れたのはそうした事情によると推定される。

4. 第2類——亜語の記法を優先する記法

第2類の混合記法は、亜語の伝統的な記法を遵守し、欧語の記法をそれに合わせて調整するものである。これには欧語の記法の調整方法を異にする2つの型がある。すなわち、欧語の語句や文を回転するものと、語句や文の各字を回転することによって縦書きにするものとである。この混合記法は20世紀中葉に縦書きを廃止した大陸の中国語ではもはや使われない。また、香港、マカオ、台湾でもそれぞれに状況は異なるものの縦書きの使用は減っている。

以後、記法の型の性質を視覚的に把握できるよう、それを図式化して節の標題に添える。亜語の書字は「甲乙丙」、欧語の書字は“ABC”によって代表させる。暗い背景は本来の記法からの逸脱を示す。

4.1. 欧語回転型——甲乙丙 A B C

これは欧語の語句や文を右に90度回転する混合記法である。現代日本の縦書き書籍に広く見られる様式である。

その最古の事例は『ぎやどぺかどる』（1599（慶長4）年）（3.1）である（豊島(2013)）。その一部を誌面の節約のために左に90度回転して掲げる。

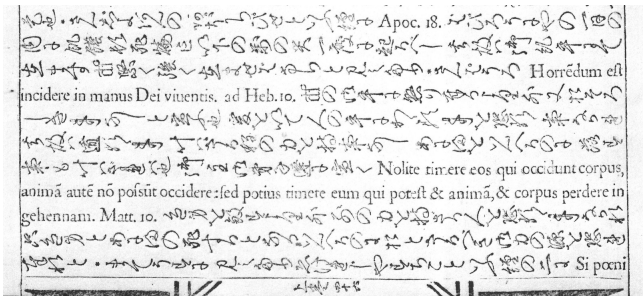


図14 『ぎやどぺかどる』上巻（1599（慶長4）年）[8)]

ここでは縦書きの日本語にラテン語が右に回転した形で埋め込まれている。

欧語回転型の記法の日本人による使用の早い例は、18世紀中葉に長崎の天文家北島見信（けんしん）が著した『紅毛天地二図贅説』の稿本（1738（元文2）年）[9] である。同書はオランダ製の天球儀と地球儀に基づいて作成された星図と地図に添えて長崎奉行に提出されたと推定される解説書である（新村(1915)、海野（うんの）(1987)）。

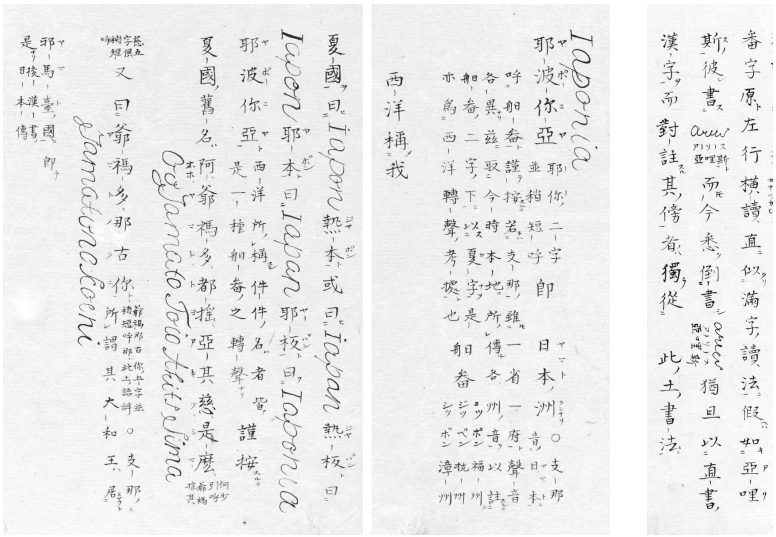


図15　北島見信『紅毛天地二図贅説』（1738（元文2）年）[10] ——本文（左）、対註例（右）

右の縦長の図は『紅毛天地二図贅説』巻之上の冒頭に置かれた「対註例」——ラテン語の語句の注釈法に関する説明——の一節である。同書で欧語回転型の記法を使うことが次のように宣言されている。句読点と一部の訓点は筆者の補充による。[11]

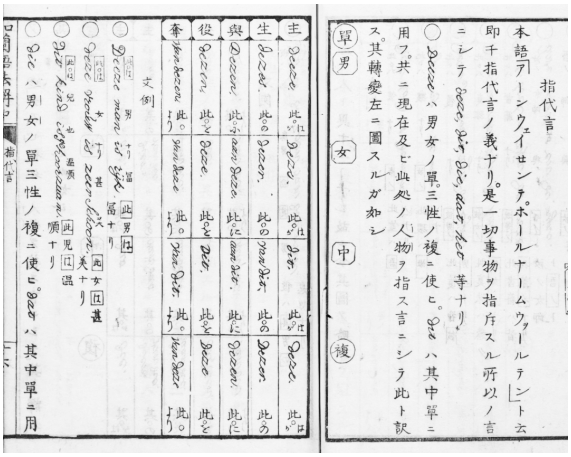
> 番字原ト左ノ行横ノ読ム、直ニ似タリ満ノ字ノ読ノ法ニ。仮ク如キ亜ノ哩ノ斯ノ、彼ノ書ス、Aries。而モ今悉ク倒ノ書ス Aries ト、（後略）。（ラテン文字は本来左から右に向かって横に読む。これは（縦書きだが左から右に向かって書かれる）満州文字の読み方によく似ている。例えば、「亜哩斯（アリース）」（白羊宮、牡羊座）は水平方向にAriesと書かれる。しかし、ここではすべて倒して書く。）

左の図は西洋の言語における世界の地名を解説した巻之中における日本の国名と地域名に関する解説の開始部分である。標題と本文中にIaponia（耶波你亜（ヤポーニヤ））、Iapon（熱本（ジャポン））、Iapan（熱板（ジャパン））などの国名が回転して書かれている。加えて、Oo Jamato Toio Akits Sima（オホヤマトトヨアキツシマ）、Jamato no Koeni（ヤマトノクニ）というローマ字表記による日本語の国名も書かれている。

『紅毛天地二図贅説』は未刊の稿本であるが、日中両語を通じ、かつ、混合記法の種類を問わず、日本人、中国人が亜語の文中に欧語の語句を欧字によって埋め込んで書いた最古の例、

先駆的な実践として特筆すべき存在である。このように欧字を使って欧語を書いた人物は18世紀終期に至るまでほかにほとんどおらず、西洋人の尋問に基づいてオランダの世界地図も援用しつつ著された新井白石の『采覧異言』（1713（正徳3）年）、『西洋紀聞』（上巻1715（正徳5）年）も、最初の蘭書の翻訳として知られる杉田玄白訳『解体新書』（1774（安永3）年）ももっぱら漢字と仮名で書かれている。[12)]

次は19世紀に出版されたオランダ語の文法書である藤林普山『和蘭（オランダ）語法解』（1812（文化9）年）と、英蘭仏露4言語の語彙集である松園梅彦編『五国語箋』（1860（万延1）年）――「五国語」は日本語を含めて5言語ということである――の各一部である。



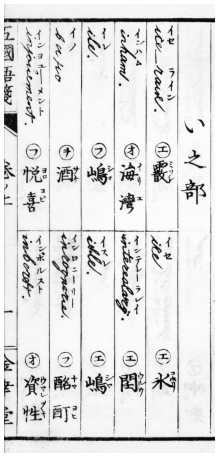


図16　藤林普山『和蘭語法解』巻之中（1812（文化9）年）（左）
図17　松園梅彦編『五国語箋』巻之上（1860（万延1）年）[13)]（右）

『和蘭語法解』ではオランダ語の語句が回転して日本語文中に埋め込まれている。[14)]

欧語回転型の記法は辞書、語学書の類に広く使われた。次はそのうちの数例である。

馬場佐十郎『訂正蘭語九品集』（1814（文化11）年）（オランダ語文法書）
村上英俊『三語便覧』（1854（嘉永7）年序）（仏英蘭類別語彙集）
大庭雪斎訳『訳和蘭（オランダ）文語』（1855（安政2）年序）[15)]（オランダ語文法書）
中浜万次郎訳『英米対話捷径』（1859（安政6）年）[16)]（英語会話文例集）
石橋政方『英語箋』（1861（万延1）年）[17)]（和英類別語彙集）

中国語に関わる欧語回転型の記法の使用開始は日本語より遅い。次は19世紀中葉の中国で英国商人ロバート・トーム（Robert Thom、羅伯聃）が著した中国人のための英語学習書『華英通用雑話』上巻、英語書名*Chinese and English Vocabulary*, Part I（1843（道光23）年）の一部である。[18)]

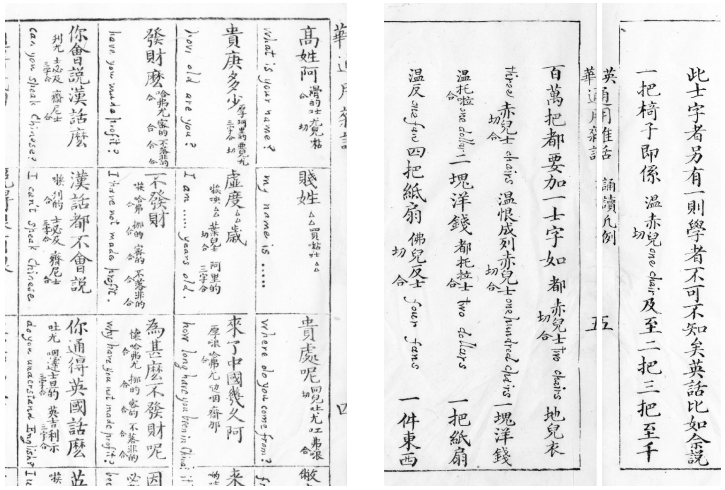


図18　トーム『華英通用雑話』上巻（1843（道光23）年）――会話文例集（左）、凡例（右）

右の図は巻頭の「凡例」の一節で、中国語文に英語の語句が回転して埋め込まれている。このくだりは英語の名詞の数に関する解説で、1つの椅子は “one chair”、「一 張 椅子」と言うが、2つ以上の椅子は “two chairs”、「兩 張 椅子」、“three chairs”、「三 張 椅子」と言うなどの説明が述べられている。[19] 左の図は会話文例を華英対訳の形で掲げた箇所の開始部分である。

次は中国人の著した英語学習書である唐廷枢『英語集全』（1862（同治1）年）の会話文例集の一部である。

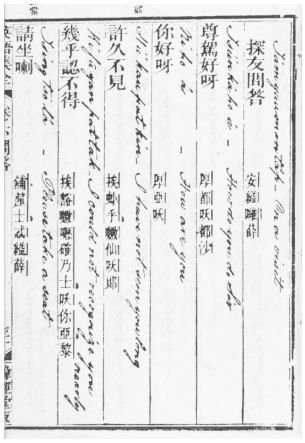
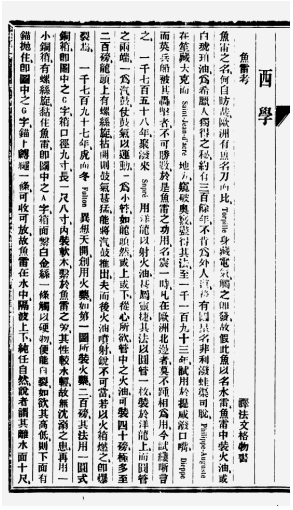


図19　唐廷枢『英語集全』巻六（1862（同治1）年）

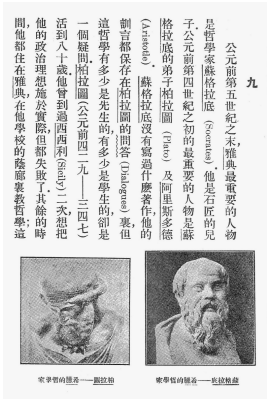
欧語回転型の記法は中国大陸ではすでに消滅したが、過去には現在の日本と同じように普通に使われていた。次は19世紀末から20世紀前半にかけての例3件である。



西學

魚雷考　譯法文格物書

魚雷之名，何自訪英誠洲有魚名刀魚，其長身藏電氣之細發，故魚以名水雷，魚雷中裝火油，或白磺，引油爲希臘人得自之秘約有三百餘年不傳爲外人所有，以至一千一百九十三年，賦用於攻城，Poliorcetes，Europe 在荅興大克而 Gustave Klein 地，鐵廠奧鉞，設行其法，至一千一百九十三年，賦用於攻城，Poliorcetes，Europe 而英吉利被其轟擊者，不可勝數，於是魚雷之功用名震一時，屯在歐洲北邊者，莫不踵相爲用，今試種噸會之，一千七百五十八年，英法開戰，法以圓管一枚，裝於津礮上，而圓管之兩端，一爲汽氣，其氣因運動，一爲小竹，如能直然，或上或下，從心所欲，管中之火油，可裝四十磅，極多至二百磅，礮上有螺絲，能將汽氣放進，出夫而後火油噴射，鉛不可當，若以火箭燃之，即爆裂為，一千七百九十七年，虎而孝，Fulton 異想天開，創用火飄，二百磅，其法用一圓式鋼箱，箱圍中之c字，箱口徑九寸長一尺八寸，內裝軟木，製於魚雷之外，其性較水輕，故無沈沒之患，再用一小鋼箱，有螺絲鉚於魚雷，即圍中之A字，箱面製白金絲一條，繞以硬而便能自裂，如欲其沈低，則下面有鉛拋在，即圍中之c字，鉛上鑽一孔，可收可放，故魚雷在水中隔數上下，純任自然，設者調其離水面十尺，



九

公元前第五世紀之末，雅典最重要的人物是哲學家蘇格拉底（Socrates），他是石匠帕克子。公元前第四世紀之初的最重要的人物是蘇格拉底的最重要的人物是蘇格拉底（Plato）及阿里斯多德（Aristotle）。蘇格拉底沒有寫過什麼著作，他的劇言都保存在柏拉圖的問答（Dialogues）裏，但這哲學有多少是先生的，有多少是學生的，卻是一個疑問。柏拉圖（公元前四二九——三四七）活到八十歲，他曾到過西西利（Sicily）二次，想把他的政治理想施於實際，但都失敗了。其餘的時間，他都住在雅典，在他學校的蘇爾裏教哲學。這

蘇格拉底的頭差——圓拉拍

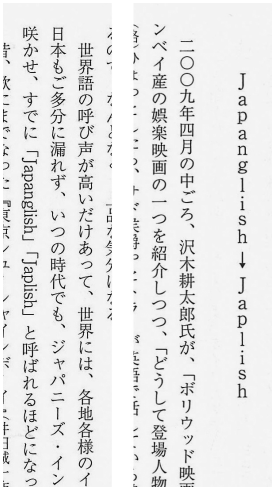
蘇格拉底的頭差——拉拍格蘇

図20 「魚雷考 訳法文格物書」『格致益聞匯報』第10号（1898（光緒24）年）（左）
図21 鄭振鐸編『文学大綱』（1927（民国16）年）（右）



●美國影片公司招得華女演員

美國 Brady Picture 影片公司，代表華僑招美女演員二名，前往該公司攝影，以備在中已聘定者錄製之用。不下百餘人，就其中已聘定者錄製之用。不下百餘人，就其中已聘定者錄製之用。不下百餘人，就其



Ｊａｐａｎｇｌｉｓｈ→Ｊａｐｌｉｓｈ

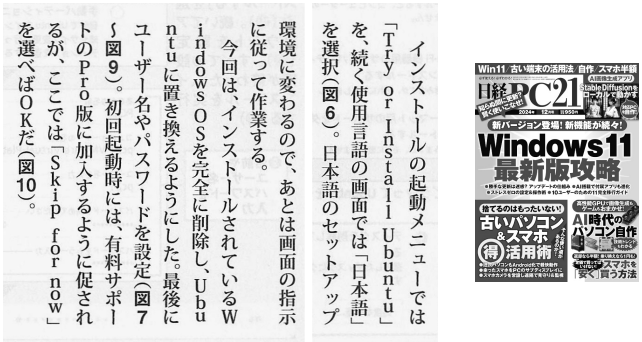
二〇〇九年四月の中ごろ、沢木耕太郎氏が、「ボリウッド映画
ンベイ産の娯楽映画の一つを紹介しつつ、「どうして登場人物

世界語の呼び声が高いだけあって、世界には、各地各様のイ
日本もご多分に漏れず、いつの時代でも、ジャパニーズ・イン
咲かせ、すでに「Japanglish」「Japlish」と呼ばれるほどになっ

図23　田中章夫『日本語スケッチ帳』（2014年）[20]

日本式の英語を表すJapanglishとJaplishという英単語が本文では欧語回転型で書かれているが、標題では「ｊａｐａｎｇｌｉｓｈ → ｊａｐｌｉｓｈ」と縦書きにされている。これが欧語縦書き型の例である。しかし、「Ｗｅｂ」や「ＨＴＭＬ」と違って字数が多く、小文字も多数混じっていて読みにくく、見た目も奇異である。おそらく、標題は日本語として書かなければならない、横書きの英語だけの標題はよくないという編集上の判断によってそのような体裁が選ばれたのであろう。[21]

次はパソコン雑誌の記事における例である。標題と本文に出て来るUbuntu（ウブントゥ）はオペレーティングシステム（OS）の名である。



インストールの起動メニューでは「Ｔｒｙ ｏｒ Ｉｎｓｔａｌｌ Ｕｂｕｎｔｕ」を、続く使用言語の画面では「日本語」を選択（**図6**）。日本語のセットアップ環境に変わるので、あとは画面の指示に従って作業する。

今回は、インストールされているＷｉｎｄｏｗｓ ＯＳを完全に削除し、Ｕｂｕｎｔｕに置き換えるようにした。最後にユーザー名やパスワードを設定（**図7～図9**）。初回起動時には、有料サポートのＰｒｏ版に加入するように促されるが、ここでは「Ｓｋｉｐ ｆｏｒ ｎｏｗ」を選べばＯＫだ（**図10**）。

図24 「さらばWindows! Ubuntuならサクサク動く!」『日経PC21』2024年12月号

ここでは記事本文中に“Try or Install Ubuntu”（Ubuntuを試用またはインストールする）、“Skip for now”（今はスキップする）という英文が縦書きで引用されている。ローマ字で書かれる用語や製品名が頻出するパソコン雑誌の記事を縦書きにするという判断がよく分からないが、読者の

縦書き嗜好を想定しての選択であろうか。[22] しかし、それにしても当の掲載誌の表紙は横書きである。

欧語縦書き型の例は探せば容易に見出すことができるが、一般的な欧語回転型に比べればはるかに少ない。中国語に関しては、過去、現在の雑誌や新聞を広く調べるすべがないこともあり、欧語縦書き型の例を筆者は確認できていない。[23]

なお、念のために付言すれば、西洋の言語においても語句の回転や縦書きが行われることはある。特に、語句の回転は本の背や建物の縦長の看板などに広く見られる処置である。[24] 縦書きはまれであるが、やはり本の背や建物の看板に見られる。とすれば、第2類の混合記法も実は欧語の記法の慣習に従ったものと考えるべきなのであろうか。しかし、注意すべきは、欧語における語句の回転や縦書きは縦長の幅の狭い領域のうちに語句を収めなければならない制約のもとで用いられる便法に過ぎないということである。広い領域に自由に書ける状況での通常の記法と同等に扱えるものではない。また、欧語での縦書きには大文字だけが使われるのが普通で、小文字の使用はたとえあるとしてもさらにまれなことであろう。

5. 第3類——欧語の記法を優先する記法

第3類の混合記法は、欧語の記法を優先し、亜語の記法をそれに合わせて調整するものである。日本人、中国人による使用という視点から見れば、自言語の伝統を軽んじ、西洋の言語の慣習を尊重してそれに従うという少々卑屈な記法である。これには亜語の記法の調整方法を異にする3つの型がある。具体的には、亜語を回転するものと、亜語を横書きにする2種類のものである。

5.1. 亜語回転型—— 

まず、先に見た欧語回転型の逆の混合記法で、欧語は普通に書き、縦書きにした亜語の語句や文を左に90度回転した形で配置するものがある。これはほぼ日本に特有と言える記法である。

次は19世紀初期に長崎でオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ（Hendrik Doeff）が中心となって編んだ蘭和辞典である通称『道訳法児馬（ドゥーフ・ハルマ）』（1816（文化13）年成稿）——『波留麻和解』（3.3）と同じく編集にハルマの蘭仏辞典が利用された——の一部である。同辞典は印刷されずもっぱら書写によって流通が図られた。

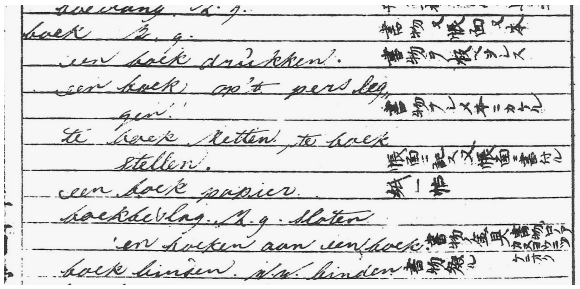


図25　ドゥーフ、吉雄権之助他編『道訳法児馬』（1816（文化13）年成稿）[25]

例えばboek（book）の項目の語釈は回転した縦書きによって「書物×冊×本」と記されている。横倒しの日本語は初めて見る者を当惑させ、実際はなはだ読みにくくもあるが、それにもかかわらず縦書きを固守するこの記法が行われたのは当時の日本人が日本語を横書きにすることにそれだけ強い抵抗感を抱いた――と言うよりむしろ、欧語は横、亜語は縦に書くものだという不動の認識があり、そもそも日本語を横に書くという発想がなかった――ということだと考えられる。

次は19世紀中葉に出版された和英対訳の会話文例集である『和英商賈対話集』（著者不明、1859（安政6）年）[26]の本文開始部である。

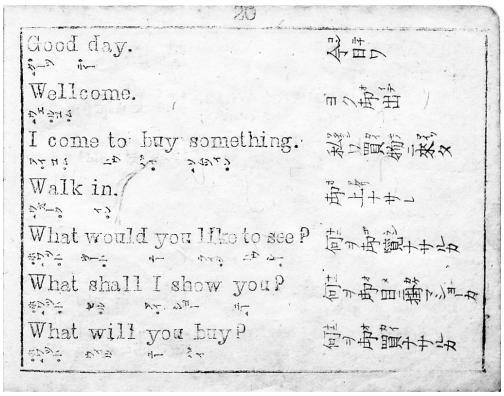


図26　『和英商賈対話集』（1859（安政6）年）[27]

日本語文の漢字にことごとく振り仮名が添えられているのは、同書が日本人の英語学習だけでなく西洋人の日本語学習をも目的として編まれていることによる。[28]

亜語回転型の記法は19世紀の日本で出版された非常に多くの辞書で使われた。『道訳法児馬』以外で特に重要なものには次のようなものがある。

桂川甫周他『和蘭字彙』（1858（安政5）年）（『道訳法児馬』の改訂刊本）

堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』（1862（文久2）年）（『和蘭字彙』を編集に利用した英和辞典）
日本薩摩学生『改正増補和訳英辞書』（1869（明治2）年）（『英和対訳袖珍辞書』改訂版の翻刻）
斯維爾士維廉士著、柳沢信大（しんだい）校正訓点『英華字彙』（1869（明治2）年）[29]（英華辞典）
岡田好樹（よしき）訳『官許仏和辞典』（1871（明治4）年）[30]（仏和辞典）
柴田昌吉（まさよし）・子安峻（たかし）『附音挿図英和字彙』（1873（明治6）年）（英和辞典）
矢田堀鴻挿訳『英華学芸詞林』（1880（明治13）年）[31]（学術用語辞典）
東京大学三学部印行『哲学字彙』（1881（明治14）年）[32]（学術用語辞典）

亜語回転型はほぼ日本に特有の記法であるが、日本語の知識を持たない英国人宣教師ウォルター・ヘンリー・メドハースト（Walter Henry Medhurst、麦都思）がバタビア（ジャカルタ）で編み、出版した英和類別語彙集・和英辞典である*An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary*（1830（道光10）年）でも使われている。

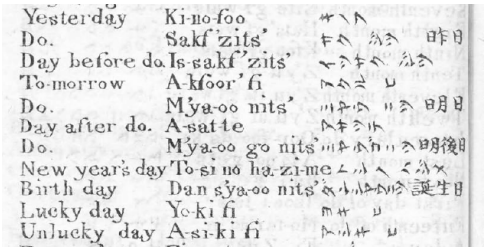


図27　Medhurst *An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary*（1830（道光10）年）

同書は、陳(2023)が明らかにしたところによれば、『道訳法児馬』の「フィッセル本」(1829年)――オランダ商館員フィッセル（Johan Frederik van Overmeer Fisscher）によるハーグ王立図書館蔵稿本――を底本の1つとしている。フィッセル本では日本語の対訳がローマ字および回転した縦書きの片仮名と平仮名によって3通りに書かれている。メドハーストの辞書は平仮名書きの要素は省いたが、『道訳法児馬』の亜語回転型の記法をフィッセル本を介して継承したことになる。[33]

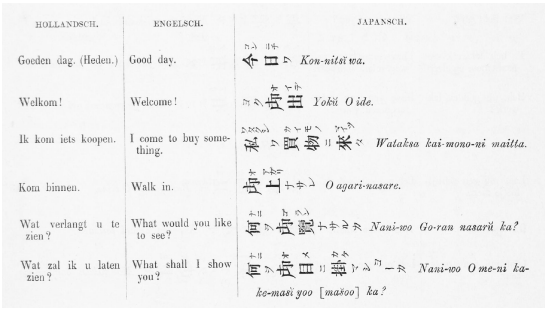
日本の慣習にならった西洋人による使用例はほかにもいくつかあり、次はオランダ商館長ヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルティウス（Jan Hendrik Donker Curtius）による日本語文法書*Proeve eener Japansche Spraakkunst*（日本語文法試論）『日本文典』（1857（安政4）年）と、ホフマン（3.1）が『和英商賈対話集』（5.1）を蘭英和対訳の会話文例集に仕立て直した*Winkelgesprekken in het Hollandsch, Engelsch en Japansch*（蘭英和商賈対話集）（1861（文久1）年）の各一部である。



Jobai- fosi va, fosi to na- daoekoe to iwedomo
星ニアラズ。 Tsioe- ten ni aroe tokoro no ten kwa no
roei nari.

Wat de verschietende sterren betreft, al heeten ze sterren, zoo zijn het toch geene sterren. Zij zijn eene soort van hemelsch vuur, dat in den middelhemel voorhanden is.

Toelichting. *Jobai-fosi*, woordelijk eene roep-ster. Deze naam staat in verband met het denkbeeld, dat tooveraars sterren roepen. *Nadoekoe to*



HOLLANDSCH.	ENGELSCH.	JAPANSCH.
Goeden dag. (Heden.)	Good day.	*Kon-nitsï wa.*
Welkom!	Welcome!	*Yôkoso ide.*
Ik kom iets koopen.	I come to buy something.	*Watakusi kai-mono-ni maitta.*
Kom binnen.	Walk in.	*O agari-nasare.*
Wat verlangt u te zien?	What would you like to see?	*Nani-wo Go-ran nasarû ka?*
Wat zal ik u laten zien?	What shall I show you?	*Nani-wo O me-ni ka-ke-maeï yoo [makoo] ka?*

図28　Curtius *Proeve eener Japansche Spraakkunst*（1857（安政4）年）（左）
図29　Hoffmann *Winkelgesprekken in het Hollandsch, Engelsch en Japansch*（1861（文久1）年）（右）

後者は日本の書籍を底本としているが、前者も『道訳法児馬』などの記法にならったものであろう。「ヨバイ(ママ)星」は流星の異称である。

ただし、西洋人による亜語回転型の使用で日本に関係しないものが確認の範囲に1件だけあり、すぐ下で見るポルトガル語・中国語辞典の末尾に添えられた追加語彙の10葉余りがそれである。そこでは「Arequa 𥫱𥫱」「China 大唐国 唐人」「Jaspão(ママ) 日本 倭奴」などと書かれている。

5.2.　亜語横書き型1 ——

A	B	C
甲	乙	丙

次に、欧語を普通に書き、亜語もそれに合わせて左から右に進む横書きで記すものがある。現在日本語、中国語の横書きの文章に広く使われている記法である。

この亜語横書き型1の記法を用いた最古の事例はおそらく、1580年代にイタリア人宣教師ミケーレ・ルッジェーリ（Michele Ruggieri、羅明堅）、マテオ・リッチ（Matteo Ricci、利瑪竇）らによって編まれたとされる未完成のポルトガル語・中国語辞典である。

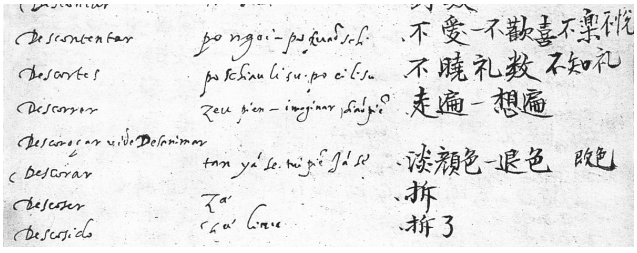


図30　ルッジェーリ他編ポルトガル語・中国語辞典（1580年代）[34]

ポルトガル語のdescontentar（不満を抱かせる）、descortes（礼儀を欠く）の対訳として中国語の「不愛」「不歡喜」、「不曉礼数」「不知礼」が横書きで記されるなどしている。その前に書かれているのはローマ字表記による訳語である。[35]

出版された書籍の例としては、ポルトガル人宣教師イグナシオ・ダ・コスタ（Ignácio da Costa、郭納爵）と同イントルチェッタ（3.1）が著した*Sapientia Sinica*（中国の叡智）（1662（康熙1）年）が早い。次は同書に収められた中国語、ラテン語対訳の『論語』の開始部分である。

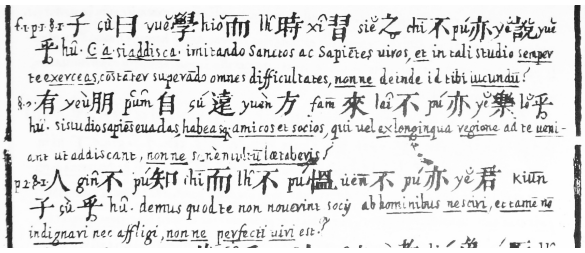
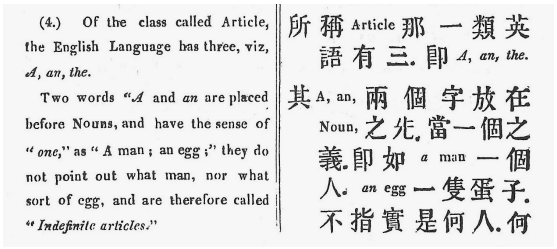


図31　Costa, Intorcetta *Sapientia Sinica*（1662（康熙1）年）

亜語の文章を横書きで書いてそこに欧語を埋め込んだ例としては英国人宣教師ロバート・モリソン（Robert Morrison、馬礼遜）が著した中国人のための英語学習書である『英吉利文話之凡例』[36]、英語書名*A Grammar of the English Language, For the Use of the Anglo-Chinese College*（1823（道光3）年）が早い。次は英語の冠詞に関する解説の開始部分である。



(4.) Of the class called Article, the English Language has three, viz, *A, an, the.*

Two words "*A* and *an* are placed before Nouns, and have the sense of "*one*," as "A man; an egg;" they do not point out what man, nor what sort of egg, and are therefore called "*Indefinite articles.*"

所稱 Article 那一類英語有三.即 *A, an, the.*

其 A, an, 兩個字放在 Noun, 之先.當一個之義.即如 *a* man 一個人. *an* egg 一隻蛋子. 不指實是何人.何

図32　モリソン『英吉利文話之凡例』（1823（道光3）年）

“article（冠詞）と呼ばれるものは英語に3つある。すなわち、a、an、theである。そのうちaとanは名詞の前に置かれ、1つという意味を表す。” 云々の説明が述べられている。ここでは横書きの中国語の文中にarticle、nounという文法用語とa、an、the、a man、an eggという語句が埋め込まれている。

19世紀後半には同様の例として、ドイツ人宣教師ヴィルヘルム・ロプシャイト（Wilhelm Lobscheid、羅存徳）による広東語話者のための英語学習書『英話文法小引』、英語書名*Chinese-English Grammar,* Part I（1864（同治3）年）と、イタリア人宣教師アンジェロ・ゾットリ（Angelo Zottoli、晁徳蒞）による中国人のためのラテン語学習書『辣丁文字』、ラテン語書名*Emmanuelis Alvarez institutio grammatica, ad sinenses alumnos accomodata*（マヌエル・アルバレスのラテン文法、中国人学習者向けに改訂）（1869（同治8）年）がある。前者は『英吉利文話之凡例』と同じく英語と中国語の対訳の形で書かれているが、後者は中国語文だけで完結し

ている。次は『辣丁文字』におけるラテン語の品詞に関する解説の開始部分である。

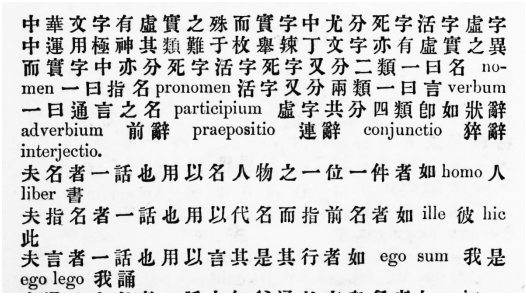

中華文字有虛實之殊而實字中尤分死字活字虛字
中運用極神其類難于枚舉辣丁文字亦有虛實之異
而實字中亦分死字活字死字又分二類一曰名 nomen 一曰指名 pronomen 活字又分兩類一曰言 verbum
一曰通言之名 participium 虛字共分四類卽如狀辭 adverbium 前辭 praepositio 連辭 conjunctio 猝辭 interjectio.
夫名者一話也用以名人物之一位一件者如 homo 人 liber 書
夫指名者一話也用以代名而指前名者如 ille 彼 hic 此
夫言者一話也用以言其是其行者如 ego sum 我是 ego lego 我誦

図33　ゾットリ『辣丁文字』（1869（同治8）年）

ここでは中国語文中にラテン語のnomen、pronomen、verbumなどの文法用語とhomo（man）、liber（free）、ego sum（I am）、ego lego（I read）などの語句が埋め込まれている。

中国人による著作の例としては、英語の語彙会話文例集である鄭仁山『華英通語』道光本（1849（道光29）年序）が早い。同書では広東語と英語の対訳が亜語横書き型1で書かれている。図中の片仮名はこれを英語の学習に使った日本人による書き込みである。

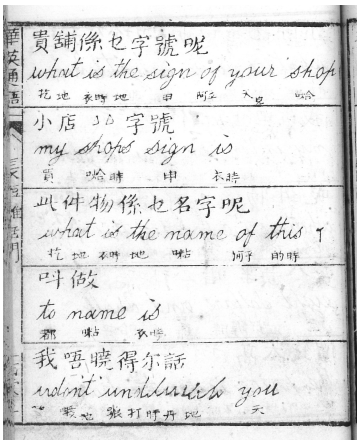

貴舖係乜字號呢
what is the sign of your shop
小店 ㄗ 字號
my shops sign is
此件物係乜名字呢
what is the name of this ?
叫做
to name is
我唔曉得尔話
what I understand you

図34　鄭仁山『華英通語』道光本（1849（道光29）年序）[37]

同書は西洋人の著した英語学習書、中国語学習書を少なくとも8点利用して編まれており（拙論（2018））、亜語横書き型1の記法もそこから取られたと考えられる。[38] 同書は、筆者の確認の限りにおいて、中国人が中国語を横書きで書いた最も早い事例である。

日本語に関わる亜語横書き型1の使用開始は中国語より遅いが、やはり西洋人の著作に始まった。早期の例の1つは、フランス人外交官・日本研究者レオン・パジェス（Léon Pagès）による*Essai de grammaire japonaise*（日本語文法試論）（1861（文久1）年）――クルティウス『日本文典』（5.1）の仏訳版――である。


ヨバイ 星ハ ホシト 名ヅクト イヘドモ 星ニ アラズ。
Yobai- fosi va, fosi to na-dsoucou to ivedomo fosi ni arazou.
申天ニ アル 處ノ 天火ノ ルイナリ。
Tsiou-ten ni arou tocoro no ten coua no roui nari.
En ce qui concerne les étoiles filantes, quoiqu'on les appelle étoiles, ce ne sont pas des étoiles. C'est une espèce de feu céleste, qui apparaît dans le ciel moyen.

図35　Pagès *Essai de grammaire japonaise*（1861（文久1）年）

日本人の著した出版物に亜語横書き型1が使われるようになったのは明治期に入ってからである。筆者の確認することのできた最も早い事例は、明治初年に出版されたドイツ語の会話文例集である西村周次郎・中村順一郎編『独逸会話集成』初篇（1871（明治4）年）である。中国人の著した『華英通語』道光本より20年余り遅い。[39]

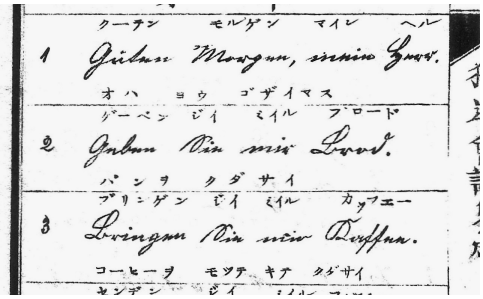
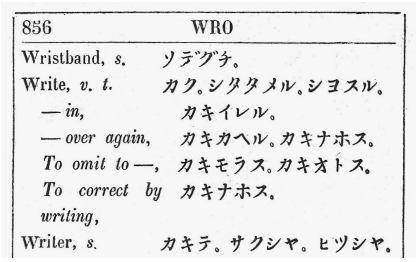

1 Guten Morgen, mein Herr.
オハ ヨウ ゴザイマス
グーテン モルゲン マイン ヘル
2 Guten Tag mein Herr.
バンヲ クダサイ
グーテン タグ マイン ヘル
3 Bringen Sie mir Kaffee.
コーヒーヲ モッテ キテ クダサイ
ブリンゲン ジー ミル カフェー

図36　西村周次郎・中村順一郎編『独逸会話集成』初篇（1871（明治4）年）

辞書においては同年に若干遅く出版された英和辞典である内田晋斎序『浅解英和辞林』（1871（明治4）年）[40]や翌年に出版された独和辞典である小田条次郎・藤井三郎・桜井勇作『孛和袖珍字書』（1872（明治5）年）――書名中の「孛」は「孛漏生（プロイセン）」の頭字――が早い例である。[41]


856 WRO
Wristband, *s.* ソデグチ。
Write, *v. t.* カク。シタタメル。シヨスル。
— *in,* カキイレル。
— *over again,* カキカヘル。カキナホス。
To omit to —, カキモラス。カキオトス。
To correct by writing, カキナホス。
Writer, *s.* カキテ。サクシヤ。ヒツシヤ。

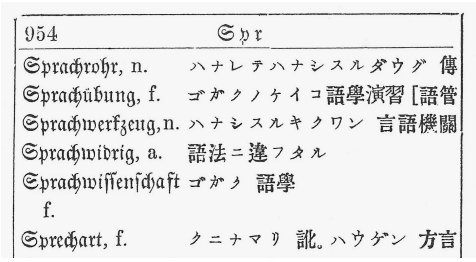

954 Spr
Sprachrohr, n. ハナレテハナシスルダウグ 傳
Sprachübung, f. ゴガクノケイコ 語學演習 [語管
Sprachwerkzeug, n. ハナシスルキクワン 言語機關
Sprachwidrig, a. 語法ニ違フタル
Sprachwissenschaft f. ゴガク 語學
Sprechart, f. クニナマリ 訛。ハウゲン 方言

図37　内田晋斎序『浅解英和辞林』（1871（明治4）年）（左）
図38　小田条次郎他『孛和袖珍字書』（1872（明治5）年）（右）

『浅解英和辞林』はJ・C・ヘボン『和英語林集成』（1867（慶応3）年）の英和の部――正確に言えば、巻末に 'An index; Or, Japanese equivalents for the most common English words' と題して収められた索引兼英語基本語辞典――を底本としてローマ字書きの日本語を仮名で書

き換えたものであり、原著の様式を再現した形になっている。そして、『孛和袖珍字書』は『浅解英和辞林』と出版者が共通であり、版面の様式もよく似ている。[42)]

次は明治期に亜語横書き型1を使って編まれた欧語の辞書の重要な例である。

松田為常・瀬之口隆敬・村松経春編『官許独和字典』（1873（明治6）年）[43)]（独和辞典）
津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳『英華和訳字典』（1879（明治12）年）[44)]（英華和辞典）
柴田昌吉・子安峻『増補訂正英和字彙』第2版（1882（明治15）年）（英華和辞典）
羅布存徳著、井上哲次郎訂増『訂増英華字典』（1883～1884（明治16～17）年）[45)]（英華辞典）
野村泰亨（やすゆき）他編『仏和辞林』（1887（明治20）年）[46)]（仏和辞典）
Ｆ・ブリンクリー・南条文雄・岩崎行親（ゆきちか）編『和英大辞典』（1896（明治29）年）（和英辞典）

日本の欧語辞典の記法はこのような出版の増加を通じて江戸期以来の第1類の対向式、第2類の欧語回転型、第3類の亜語回転型――いずれも日本語を縦書きにする記法である――から第3類の亜語横書き型1に移行していった。

その変化の潮流を反映した辞書の改訂の事例が2件あり、まず上に挙げた柴田昌吉・子安峻『増補訂正英和字彙』第2版（1882（明治15）年）は同『附音挿図英和字彙』（1873（明治6）年）（5.1に掲出）における亜語回転型を亜語横書き型1に改めている。

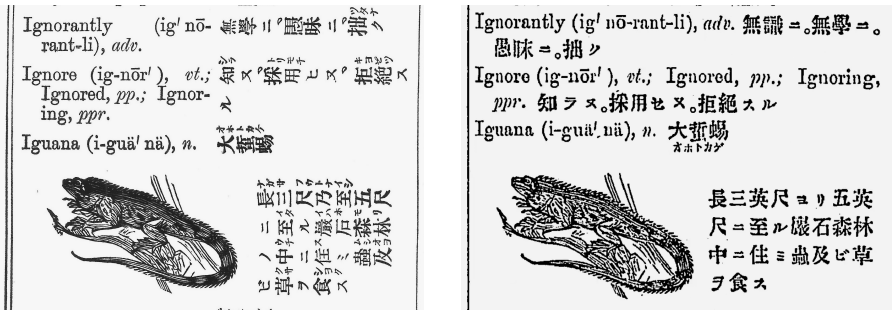
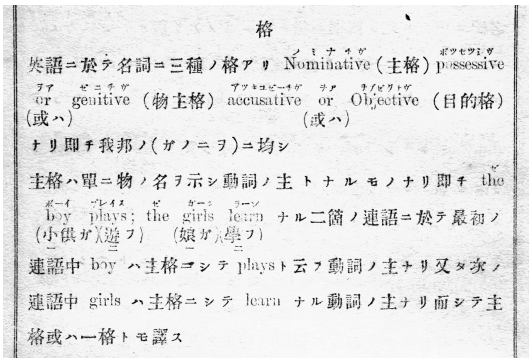


図39　柴田昌吉・子安峻『附音挿図英和字彙』（1873（明治6）年）（左）、同『増補訂正英和字彙』第2版（1882（明治15）年）（右）

同様に、東京大学三学部印行『哲学字彙』（1881（明治14）年）（5.1に掲出）もその改訂版の1つである井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造『英独仏和 哲学字彙』（1912（明治45）年）で亜語回転型を亜語横書き型1に改めている。

辞書で日本語を縦書きにする諸記法が新興の亜語横書き型1に取って代わられたのは、それが最も合理的な選択であったと結果論的には言えなくもないが[47)]、日本人が横書きの日本語に徐々に慣れて抵抗を覚えなくなったことが背景にあるはずである。そして、記法の交替を促進したのは日本人の西洋に対する崇敬の念、そこから生じる欧語尊重、欧語優先の心理であろう。

日本語の文章に横書きを使った最初の書籍は上で触れた『浅解英和辞林』（1871（明治4）年）で、巻頭の「序言」を横書きにしている（惣郷(1982)）。そして、横書きの日本語の文章に欧語を埋め込んだ亜語横書き型1の書籍の最初期の例は片岡正行『英語独学便法』（1883（明治16）年）や紅林員方訳『英語作文手引』（1884（明治17）年）[48] であった。



格

英語ニ於テ名詞ニ三種ノ格アリ Nominative（主格）possessive or genitive（物主格）accusative or Objective（目的格）（或ハ）（或ハ）

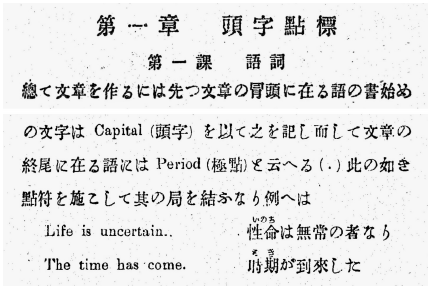
ナリ即チ我邦ノ（ガノニヲ）ニ均シ

主格ハ單ニ物ノ名ヲ示シ動詞ノ主トナルモノナリ即チ the boy plays; the girls learn ナル二箇ノ連語ニ於テ最初ノ（小倶ガ）（遊フ）（娘ガ）（學フ）

連語中 boy ハ主格ニシテ plays ト云フ動詞ノ主ナリ又タ次ノ

連語中 girls ハ主格ニシテ learn ナル動詞ノ主ナリ而シテ主

格或ハ一格トモ譯ス



第一章　頭字點標

第一課　語詞

總て文章を作るには先つ文章の冒頭に在る語の書始め

の文字は Capital（頭字）を以て之を記し而して文章の

終尾に在る語には Period（極點）と云へる（.）此の如き

點符を施こして其の局を結ふなり例へは

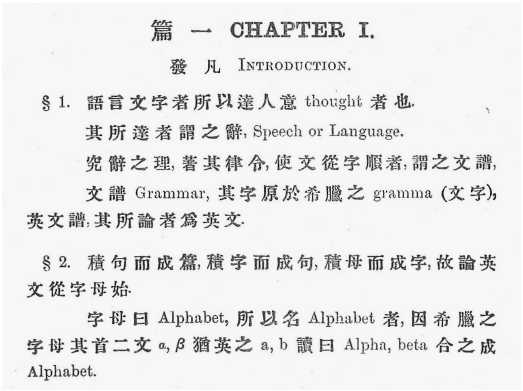
Life is uncertain.　性命は無常の者なり

The time has come.　時期が到來した

図40　片岡正行『英語独学便法』（1883（明治16）年）（左）
図41　紅林員方訳『英語作文手引』（1884（明治17）年）（右）

日本では19世紀後期のこうした書籍を皮切りに、現在普遍的に見られる亜語横書き型1による混合記法の書籍の出版が一般化していった。

中国では横書きの中国語の文章に欧語を亜語横書き型1で埋め込んだ例としてはるかに早く1820年代にモリソン『英吉利文話之凡例』があり、1860年代にもロプシャイト『英話文法小引』などがあった。ただし、それらはいずれも西洋人による著作で読者も限られていたであろう。亜語横書き型1が中国人の著作を通じて社会に普及し始めたのは20世紀初頭に厳復による英文法書『英文漢詁』（1904（光緒30）年）が出版されたころからであった（拙論(2026)）。



篇一 CHAPTER I.

發凡 INTRODUCTION.

§1. 語言文字者所以達人意 thought 者也.
其所達者謂之辭, Speech or Language.
究辭之理, 著其律令, 使文從字順者, 謂之文譜,
文譜 Grammar, 其字原於希臘之 gramma (文字),
英文譜, 其所論者爲英文.

§2. 積句而成篇, 積字而成句, 積母而成字, 故論英文從字母始.
字母曰 Alphabet, 所以名 Alphabet 者, 因希臘之字母其首二文 α, β 猶英之 a, b 讀曰 Alpha, beta 合之成 Alphabet.

図42　厳復『英文漢詁』（1904（光緒30）年）

5.3. 亜語横書き型2——

A	B	C
丙	乙	甲

19世紀には亜語を右から左に進む横書きによって書く記法も試みられた。次は中国の英語学習書である楊勲『英字指南』（1879（光緒5）年）と、日本の英語学習書である大塚秀松編『英学独稽古 単語英和字書 附会話』（1885（明治18）年）の各一部である。

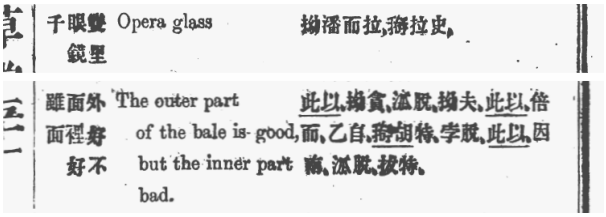




図43　楊勲『英字指南』（1879（光緒5）年）（左）
図44　大塚秀松編『英学独稽古 単語英和字書 附会話』（1885（明治18）年）（右）

「双眼千里鏡」（双眼鏡）、「外面雖好裡面不好」（（貨物の）外側はよいが内側は悪い）という中国語文、「一寸散歩致シマシテハ如何テスカ」という日本語文が右から左への横書きで書かれている。

この亜語横書き型2の記法は第1類の亜語1行1字縦書き式の記法に似ている。しかし、上の2つの図に見るように横書きが複数行にわたっているという点において、そのような箇所のない亜語1行1字縦書き式の例と異なっている。亜語が複数行にわたるという事実に基づいて亜語横書き型2と認定できる事例はきわめてまれで、筆者の確認の範囲には中国語に関わる書籍がほかに2件あるだけである（拙論(2026)）。

亜語横書き型2は、欧語に合わせて亜語を横書きにするが文字の進む向きについては縦書きの行の左行にならう記法、すなわち、欧語の慣習を優先しつつも亜語の慣習の要素を残す努力の要素を含む記法と解することができる。

6. 混合記法の日中差とその原因

以上の各節において個々に見てきた亜語と欧語の混合記法の様相に関する理解をふまえて今俯瞰的な見地から考えてみるべき問題がある。それは、日本では混合記法の種類と交替が多く見られ、中国にはそれが少ないのはなぜかということである。

日中の差を最も明瞭に観察できるのは辞書である。日本の欧語辞典に使われた主要な記法の種類を整理して図示すれば次のようになる。18世紀から19世紀にかけて使われた「旧記法」と、19世紀後半から使い始められ、その後標準として定着した「新記法」に分けて示す。

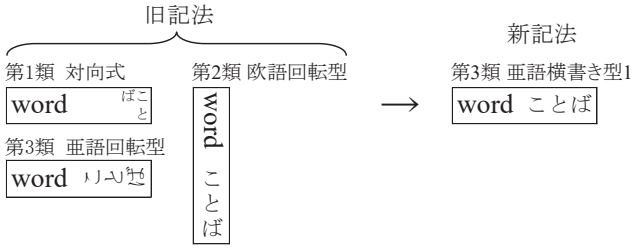


図45　日本の欧語辞典の各種記法

他方、中国の欧語辞典は、旧式の類別語彙集――18世紀中葉に編まれたいわゆる『華夷訳語』丁種本に属する西洋6言語の語彙集[49]、『華英通語』の類の英語学習書に含まれる語彙集など――を別とすれば、最初から第3類の亜語横書き型1、すなわち、新記法を使った。旧記法の辞書は中国にほぼ例を見ない。[50] この顕著な日中差は単なる偶然的な事実であろうか。

筆者の考えるところによれば、それは過去における両国人の欧語に対する態度の違いの反映である。すなわち、日本人は早くからオランダ語その他の学習に取り組み、18世紀以来辞書を含む語学書や翻訳書を多数著作、出版した。蘭英仏独を中心とする諸言語の辞書が『波留麻和解』（1796（寛政8）年）（3.3）、『英和対訳袖珍辞書』（1862（文久2）年）（5.1）、『仏語明要』（1864（元治1）年）（3.3）、『孛和袖珍字書』（1872（明治5）年）（5.2）などを嚆矢として陸続と編まれた。その際、日本語は縦に書くものだという暗黙的な理解に基づき、欧語と併せて書くときにもそれを実行した――水平方向に書き進めたいときは縦書きを回転した――。旧記法はいずれも日本語を縦書きにするものである。その1つ1つの型が、縦書きの日本語と横書きの欧語をいかにして共存させるかという問題に直面した日本人が案出した解決策であった。

それに対して、中国人は文明古国の自信と自尊から外国語を学ぶという発想を持たず――外国人、西洋人の言語を「番話」「鬼話」などの蔑称で呼んだ――、中国における語学書や翻訳書の著作は長期にわたって西洋人の意思と主導によって行われた。しかし、西洋人には中国語の縦書きを絶対視する感覚がなく、まとまった文章は縦方向にも書いたが、亜欧両語の断片を狭い領域に混在させる必要のある辞書では欧語に合わせてほぼもっぱら横書きとした。そして、初めて中国人によって編まれた近代的な欧語辞典である鄺其照（こう）『字典集成』、*An English and Chinese Lexicon, Compiled in Part from Those of Morrison, Medhurst and Williams*（1868（同治7）年）は、その書名に言う通り西洋人の編んだ辞書の記述の混成であり、各底本の使う亜語横書き型1を襲用した。20世紀の初期に編まれた重要な英華辞典である顔恵慶他編『英華大辞典』（1908（光緒34）年）でも亜語横書き型1が使われた。その時期には中国語が日本語の強い影響を受け始めており、同辞典の編集にも日本の英和辞典が利用されたが（沈(1994)、陳(2019)）、日本では辞書における旧記法はすでに廃れており中国に伝播

することはなかった。かくして中国の欧語辞典には一貫して亜語横書き型1が使われることになった。[51)]

辞書の混合記法の歴史に関する日中差は以上のような事情を背景として生じたと推定される。

7. おわりに

本小論で述べた観察と分析の総括として、日本語、中国語と西洋の言語の混合記法の種類とその相互関係を図式化して示せば次のようになる。

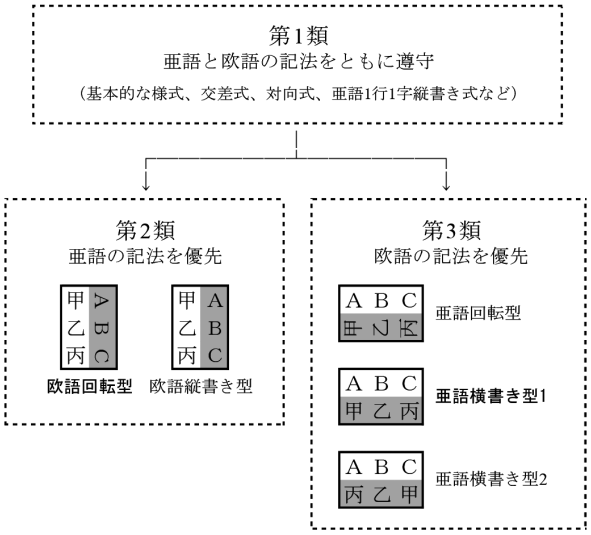


図46　混合記法の種類と相互関係

名称を太字で示している第2類の欧語回転型と第3類の亜語横書き型1が現在広く使われている記法である。ただし、中国語圏では縦書きの使用、そして、それを前提とした欧語回転型の使用は少なくなっている。

図中で3種類の混合記法をつないでいる矢印付きの分岐線は、記法間の関係を形式上どのように理解できるかということを示しており、第1類の記法が2方向に変化して第2類、第3類の記法を生じたという派生の関係を表すものではない。実際、西洋人の著作にはどの類にも1600年前後から事例があった。とは言え、記法のその後の動向としては現に、亜語と欧語の伝統的な記法をともに尊重する第1類から、活字による組版に要する労力を節約できるなどの利点を有する第2類、第3類に移行したと言うことができる。

筆者は最近中国語における横書きの歴史について考えてみる機会があった。本小論の考察はそのときに生じた関心に端を発している。すなわち、中国語の横書きは中国語と外国語を併記

する必要の発生を契機として生じた。とすれば、横書き自体の歴史に加えて、中国語と外国語を同時に書く様式の歴史もまた探求に値する可能性があることに気付いたのである。中国語の横書きの問題については拙論(2026)をご参看いただければ幸いである。

注

1) 図はLee他編(2022)所収のローマ・アンジェリカ図書館蔵稿本の影印による。Lee他編(2022)はラテン語の書名を『華語—西班牙語辞典』と訳している。

2) 図は内田慶市氏蔵本による。関西大学デジタルアーカイブ（https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/）で画像が公開されている。

3) 屋名池(2001)は夏目漱石による洋書の余白への書き込みにおける類例を示して「印刷であったらこのようなスペースが無駄になる組み方は絶対しないだろう」と述べているが、実際にはこのように印刷物にも複数の例があった。

4) 図は松村明監修『近世蘭語学資料 第1期 波留麻和解』第1巻（ゆまに書房、1997年）所収の東京大学附属図書館蔵本の影印による。

『波留麻和解』は1796（寛政8）年に出版されたと説明されることが多いが、これには異説がある。早稲田大学図書館(1953)と斎藤(1963)は、同年は原稿の完成した年であり、出版にはさらに2〜3年を要したとする。しかし、目下の議論には関わらず、事実を確認するすべもないので、異説の存在を記すにとどめる。

5) 図は東北大学附属図書館蔵本による。

6) 『増訂華英通語』の記法の変更には、片仮名書きの日本語訳と英語発音の追加によって各項目の要素数が増えたということも関わっている可能性がある。しかし、それにしても本来対向式に変えるべき理由はないので、横書きから対向式への変更は積極的な判断によるものであったはずである。

7) 図は早稲田大学図書館蔵本による。

8) 図は天理図書館編『天理図書館蔵きりしたん版集成3 ぎやどぺかどる 上巻』（天理大学出版部、1976年）所収の天理図書館蔵本の影印による。

9) 巻之上と巻之中が少数の写本などの形で伝わっている。巻之上の末尾に元文2年12月21日に完成したと記されており、同日は西暦1738年に含まれる。巻之中の成書時期も巻之上と大きくは異ならないであろう。

10) 図は東北大学附属図書館蔵の写本による。巻之中の後に書写と校合が宝暦13年1月15日（1763年）に終わった旨が付記されている。

11) 訓点の補充には京都大学附属図書館蔵の写本も参考にした。星座名のAriesは小文字でariesと書かれているが、分かりやすさのために語頭を大文字に変えた。

Ariesの最初の現れは記法の説明の必要上その体裁で書かれたものに過ぎないが、形式上第1類の交叉式に該当する。

12) 『紅毛天地二図贅説』より少し遅れて青木昆陽『和蘭話訳』（1743（寛保3）年）、同『和蘭文字略考』（1746（延享3）年）などの稿本にもオランダ語の語句や短文が欧字を使って書かれている。ただし、いずれも語学的な説明のための例示であり、欧語を使って言語外のことについて述べたものではない。

13) 各項目中に記された㋓、㋺、㋬、㋭は英語、オランダ語、フランス語、ロシア（ヲロシア）語を表す。

14) このような欧語回転型による欧語の埋込みの特殊な事例に明治初年の青木輔清『横文字独学（ひとりまなび）英学之部』初編、二編（1871（明治4）年）がある。同書は日本語を行が左から右に進む縦書きで書いており——当時

の日本の左綴じ書籍の序文によく見られる記法であるが、同書はそれを本文にも用いている――、そこに英語の語句が回転して埋め込まれている。

欧語を回転するのみならず、亜語についても行の進行方向を逆転させているのであるから、正確に言えば第2類の混合記法ではない。亜語と欧語の両方の記法に調整を施す第4の種類の記法である。しかし、ほかに同様の例を見出せないので、独立した類を設けるには及ばないであろう。

15）底本はオランダで出版されたオランダ語文法書*Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst*（グラマチカ 一名オランダ語文法）（1822年）。

16）オランダの英語学習書George Ensell *A Grammar of the English Language*（1797年）所収の英蘭対訳の会話文例集の一定範囲から取られた文例に日本語訳と英語の発音を付したもの（拙論(2023)）。扉に「中浜万次郎訳」と明記されているにもかかわらず、英語の文例も中浜が自力で書いたとする考えが長年異口同音に語られていた。

17）少なくとも2件の底本に基づいて編まれている（拙論(2023)）。

18）上巻以外の巻は出版されなかった。そのことはトームの早世に関係している可能性がある。

19）注音字の左に添えられた「切」は反切に似た表記に使われ、第1字の表す音節の始めの部分と第2字の表す音節の終わりの部分を合成して得られる音節を示し、「合」は単独の漢字でも「切」の方法でも表せない音節の表記に使われ、“複数の漢字を続けて一気に読む”ことを示す（拙論(2020a)）。

20）図で省いた範囲の内容を補って後半の3行を引用すれば次の通りである。

> 和歌語の借り方が高じたあって、和歌には、名詞各様のイハカコゝふが流行ってゐる。
> 日本ぶり多分に漏れず、この世代でも、ジャピニーズ・イハカコゝふは色とりどりの花を
> 咲かせ、すでに「Japanglish」「Japlish」と言われるまでになってゐる。

21）標題に含まれる矢印も不審である。著者は当該の2語の派生関係を論じてなどいないからである。憶測を働かせれば、編集者が日本語の読点では「Japanglish, Japlish」のようになって英語にはそぐわないと考え、2語の長短の差を派生関係の産物と解釈して矢印に置き換えたのかも知れない。

22）『日本経済新聞』の読者層を考えて縦書きを使っているということでもなさそうである。同様の体裁の記事はほかのパソコン雑誌にも見られる。

23）先に見たChirino *Dictionarium Sino Hispanicum*（1604（万暦32）年ごろ）(3.1)が「多」の語釈mucho（たくさん）をMu、choと上下2段に書き、「今即」の語釈ahora（今）をA、o、raと3段に書くなどしている――図1の範囲でも「打鉄」の語釈herrero（鍛冶屋）がHer、re、roと書かれている――のは欧語縦書き型に若干似ているが、音節を分解していないので欧語縦書き型のような読みにくさはない。

24）ちなみに、回転した書名は読みにくいうえに、回転の方向が異なる本が書架に混在しているといっそう読みにくいという問題がある。

25）図は松村明監修『近世蘭語学資料 第3期 道訳法児馬』第1巻（ゆまに書房、1998年）所収の静嘉堂文庫蔵本の影印による。

26）同書の著者と著作の過程については拙論(2023)で考察した。

27）図は大阪公立大学図書館蔵本による。

28）巻頭の「凡例」で「和英両国ノ商賈便用ノ為ニ編ム」と説明されている。総振り仮名は過去には日本人のための書籍にも広く行われたので、振り仮名だけに基づいて外国人のための書籍だと言えるわけではない。

29）米国人宣教師サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams、衛三畏）の編んだ*An English and Chinese Vocabulary, in the Court Dialect*『英華韻府歴階』（1844（道光24）年）の中国語

の訳語に訓を附したもの。

30）アイルランド出身の歴史家、旅行作家トマス・ニュージェント（Thomas Nugent）によるフランス語辞典の没後改訂版*Nugent's Pocket Dictionary of the French and English Languages*（19世紀）に基づいて編まれた。

31）Justus Doolittle *Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language*『英華萃林韻府』, Vol. 2（1872（同治11）年）所収の各種語彙集の一部を再編、翻訳したもの。

32）William Fleming *The Vocabulary of Philosophy, Mental, Moral, and Metaphysical*（1857年初刊）に基づく。

33）図中に見る「昨日」「明日」などの漢字で書かれた訳語はフィッセル本にはなく、おそらくほかの依拠資料による。陳(2015)の記述にある依拠資料には横書きのものがなく、中国語を知るメドハーストが自身のなじんだ記法を使ったのであろう。ただし、「Radish Dai kon ㇳㇰ ㅁㅅ 大根」「ㄱ 羽 Ha A feather」「ㅣㅛ ㅎ 荷物 Nimots' Goods, merchandize」などの項目が示す通り、漢字書きの語も中国語ではなく日本語である。

ちなみに、先に挙げた『英語箋 一名米語箋』前編（1857（安政4）年）と同後編（1863（文久3）年）(3.3)はこのメドハーストの辞書の和刻本であるが、そこでは記法が第1類の対向式――それもまた日本特有の記法であった――に変更されている。

34）図はWitek編(2001)所収のローマ・イエズス会文書館蔵稿本の影印による。稿本には書名の表示がないが、Witek編(2001)では*Dicionário Português-Chinês*、『葡漢辞典』と呼ばれている。

35）屋名池(2003)は中国語の横書きは20世紀初期に日本の影響によって始まったらしいと伝聞調で述べているが、事実は大きく異なっていた。また、屋名池は19世紀後半の浮世絵の標題に横書きの最初の例が見られるとし、日本語の横書きを“文字を回転させることなく縦書きを横書きに変えた世界に稀な例”と説明するが、中国語には横書きの例が16世紀末からあった。

36）扉には『英国文語凡例伝』という書名が書かれている。

37）図は既知唯一の現存本である大阪大学附属図書館蔵本（拙論(2018)）による。

38）『華英通語』道光本の基礎を成したと考えられるトーム『華英通用雑話』は欧語回転型を使っているが(4.1)、それ以外の依拠資料はすべて亜語横書き型1を使っている。

『華英通語』咸豊5年本、同咸豊10年本、『英話註解』、『華英通語集全』は『華英通語』道光本を起点として編まれた一群の英語学習書であるが、記法を全面的ないし部分的に第1類の亜語1行1字縦書き式に変えている（3.4）。それは伝統的な記法への回帰と解することができ、『華英通語』道光本が使った横書きが当時まだ中国人にとって受け入れにくい時期尚早の記法であったことを示唆している。

39）出版物という条件を外せば、早稲田大学図書館に『博物語彙』の書名を付して収蔵されている宇田川榕庵（1846年没）の蘭和語彙集稿本が日本語を横書きにしており（屋名池(2003)）、亜語横書き型1に相当する。同語彙集はモリソンの英華辞典を底本の1つとしており（拙論(2021b)）、それにならったものである可能性がある。しかし、屋名池も言う通り、その後100年以上にわたって類例を見ない孤立的な存在である。

亜欧混合の表記の例ではないが、横書きの日本語はさらに早く『蘭学階梯』（1783（天明3）年序、1788（天明8）年刊）にも見られる。そこでは、日本語を欧字で書けることが“Woeyetemi// / //io Vanano / Sodatanoe / Satomonasi / Kocolokala / koso miwa / Jieiasikele.”（植ゑてみよ 花の育たぬ 里はなし 心からこそ 身はいやしけれ、下の句の意味は不詳）という和歌を例に説明されている――句中の「/」は改行を示す――。振り仮名という文脈ではあるが対訳の併記における横書きと本質的に共通であり、筆者の把握の限りにお

いて、日本語を横書きにした最も早い例である。もっとも、これも後世の横書きの普及にはつながっていない。

40)『独逸会話集成』初篇は扉に「明治四稔辛未八月」、『浅解英和辞林』は扉に「明治四年辛未初冬」と書いている。『浅解英和辞林』は序文にも横書きを使っており、日本語の文章を横書きにした最初の事例となっている（惣郷(1982)）。

41）ドイツ語に関しては、『孛和袖珍字書』の前年に出版された『独逸訳附単語篇』（1871（明治4）年）も亜語横書き型1によっている。ただし、類別語彙集の小冊子であり、通常の辞書の範疇に入るものではない。

42)『浅解英和辞林』では扉に「蔵田氏新鐫」、“PRINTED BY KURATA”、『孛和袖珍字書』では “Gedruckt in der Kurata Buchdruckerei”（Kurata印刷所にて印刷）と書かれている。当の出版者蔵田清右衛門を津田編(1934)は「我国最初の印刷業者」と説明している。蔵田の出版した堀田政次郎訳『和英対訳会話編』（1871（明治4）年）でも亜語横書き型1が使われている。

43）序文の説明によれば、「独蘭独英及ヒホッフマン氏且ツウエベル氏ノ字書」を参考にして編まれている。そのうちホフマンの辞書については、Stalph他(1999)はWilhelm Hoffmann *Vollständiges Wörterbuch der deutschen Sprache*（1861年）であるとする。

44）底本はロプシャイトによる4巻本の英華辞典*English and Chinese Dictionary*『英華字典』（1866～1869（同治5～8）年）。

45）底本はロプシャイトの英華辞典（前注）。『訂増英華字典』の扉はロプシャイトの中国名に「布」を加えて「羅布存徳」にしている。

46）底本は漢文による序文で「律篤礼」の著したフランス語辞典の「茅戎」らによる簡約版の1つであると説明されており、*Dictionnaire de la langue française abrégé du dictionnaire de É. Littré par A. Beaujean*（19世紀）を指すと見られる。

47）亜語と欧語で文字の進行方向が一致し、かつ、両語の文字が正立するという条件を設ければ、可能な混合記法は亜語横書き型1と極端に読みにくい欧語縦書きだけになる。

48）巻頭の「例言」に「米人秘涅阿氏著ス所ノ作文手引一編ヲ抄訳」したと書かれている。当の底本はTimothy Stone Pinneo *Pinneo's Guide to Composition*（1864年）であろう。

49）「西洋館訳語」と総称し得るラテン語、ドイツ語、ポルトガル語、フランス語、イタリア語の各語彙集と、『**嘆**咭唎国訳語』という英語の語彙集が古いチベット語の類別語彙集を基礎として編まれた。それらの語彙集の内容や編集方法については拙論(2020b, 2021a)で考察した。

50）5.1の最後に触れた辞書稿本への追加語彙リストが筆者の把握する唯一の例外である。

51）先に、第2類の欧語回転型の記法の使用開始が中国語では日本語より遅かったと述べた（4.1）。このことも、中国では亜欧混合の著述がもっぱら西洋人によって始められたことに関係している。欧語回転型は亜語の縦書きの伝統を守り欧語を回転して記すものであるから、西洋人が好んで使う性質の記法ではなかった。欧語回転型の中国初の例はトーム『華英通用雑話』（1843（道光23）年）であるが、「凡例」における英語の注音の解説から執筆には中国語と満州語の両方に通じた人物が深く関与していることが分かる。

参考文献

海野一隆(1987)「ファルク地球儀伝来の波紋」有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅷ』（創元社）

斎藤信(1963)「稲村三伯（海上随鴎）―彼の生涯と『波留麻和解』研究―」『名古屋市立大学教養部紀要 人文社会研究』第8巻

沈国威（1994）『近代日中語彙交流史―新漢語の生成と受容―』（笠間書院）
新村出（1915）「紅毛天地二図贅説」『典籍』第2号（古書保存会）
惣郷正明（1982）「ことばの散歩・11 縦書き、横書き再説」『言語生活』371
田野村忠温（2018）「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜―附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻
田野村忠温（2020a）「注音の『切』、『合』、小字」内田慶市・田野村忠温編著『『華英通語』四種―解題と影印―』（関西大学出版部）
田野村忠温（2020b）「北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析―西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に―」『待兼山論叢』第54号文化動態論篇（大阪大学大学院文学研究科）
田野村忠温（2021a）「『嘆咭唎国訳語』の編纂者と編纂過程―中国最初の英語辞典の分析―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻
田野村忠温（2021b）「音訳語『珈琲』の歴史」『阪大日本語研究』33（大阪大学大学院文学研究科日本語学講座）
田野村忠温（2023）「幕末英語学習書4点の依拠資料と著作者―『英米対話捷径』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんぎりしことば』―」『或問』第44号（近代東西言語文化接触研究会）
田野村忠温（2026）「横書き中国語の初期相― “中国初の横書き書籍” の議論をめぐって―」『東アジア文化交渉研究』第19号（関西大学大学院東アジア文化研究科）
陳力衛（2015）「メドハースト『英和和英語彙集』（1830）の底本について」中山緑朗編『日本語史の研究と資料』（明治書院）
陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播―漢語を媒介に―』（三省堂）［「第Ⅱ部 第6章 英和辞書による中国語への語彙浸透」］
陳力衛（2023）「『ドゥーフ・ハルマ』のもう一つの流れ―フィッセルのローマ字本の位置づけ―」『国語と国文学』第100巻第1号
津田伊三郎編（1934）『本邦活版開拓者の苦心』（津田三省堂）
豊島正之（2013）「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」豊島正之編『キリシタンと出版』（八木書店）
屋名池誠（2001）「縦書き・横書きの日本語史1 漱石の書き入れから」『図書』2001年7月号（岩波書店）
屋名池誠（2003）『横書き登場―日本語表記の近代―』（岩波書店）
早稲田大学図書館（1953）『開国百年記念 新文化の源流 洋学展覧会目録―自筆本を中心として―』（早稲田大学図書館）［「〔二五六〕江戸ハルマ和解稿本」（斎藤（1963）によれば執筆者は岡村千曳（ちびき））］
Lee, Fabio Yuchung, Tsung-jen Chen, José Luis Caño Ortigosa, Wen-cheng Shih, Regalado T. José and Louis Ianchun Ng (eds.) (2022) *Hokkien Spanish Historical Document Series IV: Dictionarium Sino-Hispanicum*. Hsinchu, Taiwan: National Tsing Hua University Press.
Stalph, Jürgen und Harald Suppanschitsch (1999) *Wörterbücher und Glossare: Eine teilannotierte Bibliographie japanisch-deutscher und deutsch-japanischer Nachschlagewerke*. München: Iudicium Verlag.
Witek, John W. (ed.) (2001) *Dicionário Português-Chinês*. Lisbon: Biblioteca Nacional Portugal.

（人文学研究科名誉教授）